感　想　文

50 年ほど前、沢木耕太郎はニューレフトの旗手といわれ、さっそうと登場してきた。
慶應初ともいえる学費闘争を経験し、65 年安保に出あい、かなり過激になってきた学生運動にうんざりし始めた私にとって、新鮮な書き手だった。今回テキストに取り上げるべく、本棚をひっくり返したら、最近のエッセイを含め著作が十数冊でてきた。
その間沢木は広い視野をもって、様々なテーマを取り上げている。「若き実力者たち」で取り上げた人々は、その後第一線で活躍しているし、「深夜特急」では、日本の若者世代に多くのバックパッカーを生んだ。若くもない私も、ポルトガルのロカ岬まで行って、証明書なんかをもらって、「深夜特急」に出てたなと感動した。「キャパの十字架」では、パズルのように資料を詳細に組み合わせ、真実を追求しようとしている。様々な書き方を駆使し、阿川佐和子もかくやというほどのインタビュアーとしての能力は、話題をキャッチする売れっ子ライターと見えないこともないが、一貫して沢木の視線は、敗者、弱者に向けられ、静謐で優しい。いつか講演会で見かけた、白いコットンパンツにＴシャツの似合う背の高い青年のイメージは変わらない。
例会のなかで、〈カメラマンとしての沢木耕太郎〉という評価のあったことは、ミーハーファンの私にとって、大変うれしい収穫であった。（松倉）